

その考えはもう古い！

最新・感染症診療

2020 年末、日本の感染症学のバイブルともいべき青木 眞先生の『レジデントのための感染症診療マニュアル』の第 4 版が出版された。初版が出版されたのが 2000 年であったので、そこから約 20 年が経過したことになる。私を含め多くのレジデント（そして元レジデント）がこの本を手にも臨床感染症を学んできたこの 20 年の間、臨床感染症の教育に触れる機会は飛躍的に増え、日本の感染症診療の裾野は大きく広がった。「発熱・CRP や白血球上昇に対して抗菌薬を使わない」「問題の臓器・解剖と原因微生物を検討する」といった感染症診療の基本原則は、感染症診療にあたる医師の共通言語となった。一方、例えば抗菌薬の治療期間など慣習に行われていたプラクティスを見直すきっかけとなるような知見も増えており、感染症診療も日々進化している。

2020 年は、新型コロナウイルス感染症の登場とその世界的な流行によって、世界の風景と私たちの日常生活が一変した年でもあった。ただし、これまでもさまざまな新興感染症や再興感染症があり、新型コロナウイルス感染症についてもその流れの中で捉えると少し見かたも変わるかもしれない。また、新型コロナウイルス以外の感染症に日々遭遇することにも変わりはなく、それぞれの感染症について知識をアップデートしていく必要があることにも変わりはない。

2020 年コロナ禍の最中に企画・準備させていただいた今回の感染症特集では、青木先生と、青木先生のもとで学ばれて感染症教育のリーダーの 1 人としてご活躍されている上原由紀先生のお 2 人にお話を伺った。この 20 年の間に臨床感染症で変わったこと・変わらないことを改めて教えていただくことで、現在を理解し、未来へ備えるヒントをいただいている。本編では、新型コロナウイルス感染症から少し離れ、普段あまり深く考えることなく行っている検査・治療、臨床現場でよく遭遇する疑問について、感染症診療の最前線でご活躍の先生方に最新の知見を基に解説いただいた。各トピックは、日常診療の中で私自身が疑問を感じたり、同僚医師・研修医・医学生の方々から質問をいただくことが多い内容を選んだ。ベテランの先生方には古くなった知識のアップデートに役立ち、初学者の方には最新の基本原則を学んでいただ

ける構成になっていると思う。全編を通じて多数の抗菌薬が登場するが、付録に抗菌薬略語一覧をつけたので、研修医・医学生の方々は是非参考にさせていただきたい。

私にとって臨床感染症診療の醍醐味の1つは、臨床症状が似通った非感染症疾患との鑑別診断である。自分自身これまで忘れられない症例がたくさんあり、なかには指導医や同僚から耳学問として学んだものもある。医学生や研修医の方々が最も目を輝かせる瞬間はそういった症例について聞いているときであるように思う。そこで、本特集では上記の総説と対になるかたちで、総合診療・膠原病診療の達人として名高い先生方に忘れられない感染症ミミック（非感染症と感染症で迷った症例）とそこから得られた教訓（パール）をシェアしていただいた。臨床医として熱くなるような、こういう機会でないといけない症例ばかりを教えていただいたので、ぜひ自分の引き出しに加えていただきたい。

コラムでは、さらに後進への教育を行う際のtipsを紹介していただいた。“To teach is to learn”を実践されている先生方から生涯教育・臨床教育のパールをぜひ学んでいただきたい。

最後に、新型コロナウイルス感染症の対応で多忙を極めるなか、素晴らしい原稿を寄せてくださった執筆者の先生方に改めて深く感謝申し上げたい。さまざまな現場で奮闘されている読者の皆さんに臨床感染症の「今」を切り取ったこの特集を読んで、明日の感染症診療へのモチベーションをぜひ高めていただきたい。

岡本 耕（東京大学医学部附属病院感染症内科）